



カイロ会談（ローズヴェルト大統領記念図書館蔵）

〈講演〉

蒋介石の書簡外交、1936-1941年

麻田雅文

ただいまご紹介に預かりました、岩手大学人文社会科学部の麻田と申します。私は二〇〇三年の卒業生です。こちらに参るのは一〇

数年ぶりです。

私の研究は、ロシアとアジアの国際関係史です。現在は、スターリンと蒋介石の往復書簡を中心に研究しています。彼らが往復書簡を頻繁に交わしたのは、日中戦争の勃発した一九三七年から、アジア太平洋戦争の終結した一九四五年までです。本日の報告は、書簡の

内容に入る前に、第二次大戦前後において、首脳間における手紙のやり取りというのは、どのようになされたのかを論じ、手紙の内容へと話を広げるつもりです。

この写真はカイロ会談のもので、一番左にいるのが蒋介石ですね。そしてアメリカのローズヴェルト大統領。イギリスのチャーチル首相もいます。では右端の女性は誰か。蒋介石の妻、宋美齡です。彼女は、英語が堪能です。幼くしてアメリカに留学させられて、一〇代半ばまでアメリカにいました。「私は、顔以外はすべてアメリカ人」とも言ったぐらいです。蒋介石は、各国の首脳間であまり人気がなかったのですけれど、宋美齡は、大変な人気でした。

首脳間の外交手段は、主に三つです。会談で、実際に顔を合わして重要事項を話し合うということができれば、それだけでも外交的には大きな成果です。たとえ意見の一致を見なくても、問題があることを双方が共有することになります。ただ、連合国の主導者たちは非常に多忙です。そして、いずれも離れて任んでいます。彼らが

一堂に会することは、ついにありませんでした。カイロ、テヘラン、ヤルタ、ポツダムという四つの会談が有名ですが、いずれも誰か一人は欠けているんですね。カイロ会談では、スターリンがいませんでした。

では、他の二つの連絡手段です。一つは外交官が仲介役となって、双方の意思を伝達する方法です。駐ソ大使、駐米大使、駐英大使、駐華大使と呼ばれる外交官が、それぞれその国の元首と会談して、メッセージを伝達する。これは非常に頻繁に行われていました。時と場合によっては、蒋介石に一日に何度も会っている大使もいますけれども、このやり方で問題なのは、外交官の私見が、どうしても報告書に反映されてしまう。大使も人間ですから、それぞれ、首脳とは完全に意見が一致していない場合もあります。そのような場合は、多少、その報告書にバイアスがかかってしまうことはやむをえません。

そして三つ目が書簡です。書簡は非常に珍重されていました。最も格が高いのは、直筆のものです。ただ、多くの首脳は、そのようなものは用意しませんでした。タイプ打ちのものに署名して、それを大使などに持たす。あるいは電信で流した上で、その訳文を大使が渡します。

ご紹介したどれもが、重要な外交手段であることは間違いありません。しかし、どちらかというと、これまで第二次大戦下の連合国の首脳外交と言えば、会談や、外交官のやり取りが着目されていることが多かったと思います。手紙単体での研究というのはあまり多くはない。それはあとで述べますが、史料状況が大きく影響してい

ると思います。

では、どのような史料状況なのか。二〇〇五年に出た、スターリンとローズヴェルトの往復書簡集があります。⁽¹⁾『親愛なるスターリン様へ』という、ちょっとショッキングなタイトルかもしれませんが、当時はこの書き出しで、ローズヴェルトは手紙を書いていました。そして二人の関係は非常によかった。いわば、米ソの蜜月でした。彼らは、非常に頻繁に往復書簡を交わしています。

しかし、それ以上にローズヴェルトが頻繁に手紙を交わしていた相手は、チャーチルでした。スターリンとは一九四一年以降に限られますが、チャーチルとは一九三〇年代から、頻繁に手紙のやり取りをしております。チャーチルにとって、アメリカの支援は、ナチス・ドイツと戦う上で命綱でした。ですから、戦略上、非常に話し合うことが多かったわけです。一方、ローズヴェルトにしても、ヨーロッパで唯一残ったナチスに対抗する勢力として、イギリスは重要でした。結果として、大量の書簡が残されます。⁽²⁾

さて、次は、一九五七年にソ連の外務省が編んだものです。⁽³⁾首脳間の往復書簡を最初にまとめたのは、実はソ連でした。ソ連外務省が編纂しているところがポイントでしょう。一九五七年のフルシチョフ時代に、書簡集を出すわけです。ここには、何らかの意図が感じられます。大戦下は、非常に首脳同士の交流が密で親密でした。それに比べて、一九五七年は冷戦の時代です。これをソ連外務省が主導して出すのは、友好のメッセージだったのではないかと推測しています。スターリンが一九五三年に死去し、ソ連はいわゆる「雪解け」の時代でした。

この書簡集には問題があります。のちに判明したのですが、一九五七年の書簡集は、かなり内容がカットされていました。そうした中、二〇一七年に、再びロシア外務省が往復書簡集を出しました。⁽⁴⁾こちらはぶ厚い。一九五七年のものは三〇〇ページ足らずですが、今年出たものは七〇〇ページ超のものが二巻です。今年、なぜこれを外務省は出したのか。私としては、やはりこれも米英への関係改善のシグナルなのではないか、と深読みしています。これには、ラブロフ外相が自慢げに語る音声と画像も、ロシア外務省により公開されているので、興味がある方はネットでご覧ください。⁽⁵⁾ただ、これも問題があります。これは全編ロシア語です。チャーチルやローズヴェルトが書いた原文は見られない。ではどうすればいいのか。それについては後ほど。

ここまで見てきたように、第二次大戦下の指導者たちは非常に密な関係を築いて、しかも書簡のやり取りをして、外交官を通さずに、首脳間で意思決定をする場合もまま、ありました。では、翻って、枢軸国側はどうなっているのか。ヒトラーとムッソリーニの往復書簡集が出ていますが、非常に薄いです。⁽⁶⁾二〇〇ページに満たない。しかも、ヒトラーは基本的にムッソリーニには大切なことを相談しません。例えばバルバロッサ作戦が、一九四一年六月に発動されまです。ソ連侵攻作戦です。いつムッソリーニに、きちんと目標などを説明したのか。六月二一日の書簡でした。つまり開戦前日です。そのぐらい、ムッソリーニは軽んじられていました。

では日本とドイツ、日本とイタリアの間はどうだったのか。これが謎です。例えば、ヒトラーやムッソリーニの誕生日に、日本の首

相が祝電を送っていたのか。逆もまたしかりです。天皇誕生日に、あちらから手紙は送られていたのか。こういうことは、皆目わかりません。今日お集まりの方は、日本史の方もいらっしやると思いますが、もし、往復書簡を見つけれたら、ご一報頂きたいと思います。

話がそれましたが、いよいよ蒋介石です。蒋介石は、先ほど見たように、今までまとめられた書簡集というのは、ほとんどありません。例外はローズヴェルトとの間で交わされた書簡集で、一九七八年に出ています。⁽⁷⁾これも政治的な意図を感じます。つまり米台関係、アメリカと台湾との関係も考えなければいけないのですが、今日は深入りしません。

日本では、蒋介石の書簡集が二〇〇〇年に出ました。⁽⁸⁾これは、現在の中国、台湾ではまだ刊行できないそうです。機微に触れるところが多々あるからというわけです。一九一〇年代からの書簡を拾ってくれているのですが、残念なことに、外国の元首との書簡のやり取りは、ほとんど収録されていない。

では他に方法はないのか。いわゆる文書館の史料を採すしかありません。有難いのは、各史料館が、ネットで史料公開を進めてきていることです。

ニューヨーク州には、ローズヴェルト大統領記念図書館があります。アメリカ大統領は引退すると、自分の記念館兼図書館を故郷に建てるのが慣行でして、ローズヴェルトの場合、ニューヨーク州にあるわけです。この図書館がネットで各国の元首との往復書簡を公開してくれています。ホワイトハウスのマップルーム (Map Room) という、機密文書を扱う部署に保管されていたもので、そちらのフ

オルダを開けると、各国の元首との往復書簡はすぐに見つけることができます。

蒋介石についても、非常にたくさんあります。しかし一九四一年から一九四五年に限定されています。一九四一年は太平洋戦争開戦の年で、一九四五年はローズヴェルトが亡くなった年です。もっとあるのではないかと疑っていますが、詳細は現地に行かないといかないかもしれません。こちらで紹介するのは、ローズヴェルトが蒋介石に送った書簡です。彼は英語で書簡を書いて、署名すらタイプ打ちが多いです。

では、蒋介石の場合はどうか。こちらは一九四四年一〇月、ローズヴェルトに送ったものですが、基本的には、書式は同じです。残念ですが、ローズヴェルト大統領記念図書館がネットで公開しているものには、中国語の原文がありません。英語に訳されたものだけです。それは、ローズヴェルトが直接目を通したものだけなのかもしれません。やはり漢字文化圏の人間としては、微妙なニュアンスを伝える、その原文を知りたいところです。

では、チャーチルはどうでしょう。チャーチルについてはロンドンに行けば、ということになるのですが、現在はその必要はほとんどありません。数年前に、「チャーチルアーカイブ」が公開されました。⁽⁹⁾チャーチルの持っていた個人文書を、ネット上で公開しようというものです。有料でして、なかなかお値段が張るので、私もまだトライアルでしか使ったことがありません。ただ、蒋介石とチャーチルも頻繁に書簡をやり取りしていたことが、このサイトからわかります。彼らは戦時中、どういう接点があったのか。例えばビル

マ。現在のミャンマーですね。あそこで中国軍とイギリス軍は共同作戦を展開して、日本軍と戦っていたことがありました。そういうこともあって、非常に彼らは往復書簡が多いのですけれど、ほとんど研究は手付かずです。

ただ、次第に台湾の方でも、史料の公開が進んでおります。例えば、『蔣中正先生年譜長編』全二巻⁽¹⁰⁾です。蔣中正、これは誰かという、蒋介石です。彼の詳細な年譜です。今までも年譜がなかったわけではありません。あったのですが、やはり国民党政権時代のものになると、個人崇拜がはなはだしいですね。そこで、事実にもとづいた中立的な、これはカッコつきですが、年譜を作ろうじゃないかというプロジェクトが始まり、刊行に至ったわけです。この中に、各国の元首とのやり取りも、中国語で見ることが出来ます。

気をつけなければいけないのは、年譜なので、書簡は大幅に省略されていたりする。私としては、全部載せてほしかったところではそういうのはなかったのかという、実は、『蔣中正先生年譜長編』が依拠したものがありません。『事略稿本』です。蒋介石が生前前から書き止められていた備忘録です。非常に細かくて、往信、来信、ほとんどが掲載されています。

こうした蒋介石の各国元首とのやり取りは今、どこにあるか。台北の国史館です。ですが、ここに行く必要も、なくなりつつあります。今年(二〇一七年)の一月ですけれど、国史館が蒋介石の持っている個人文書を、ネットで公開しはじめたからです。登録にはパスポートなどの写しが必要ですが、無料で、簡単に文書を見ることが出来る。ここまで文書公開が広がったのは、ひとえに、国民党政

権の下野が影響していると思います。そういう意味では、蔡英文総統に感謝しなければいけない。ただ、第二次大戦後についてはまだ現地へ行く必要があります。

では、書簡には一体何が書かれているのか。今日は蔣介石と文書を交わした人物を二人取り上げたいと思います。最初はヒトラーです。学校で習う歴史では、ヒトラーは日本と提携していたはずですが、確かにそうですが、裏も見ると、必ずしもそうとは言いつれない。

この点は、成城大学の田嶋信雄先生がご研究されています。⁽¹²⁾

連合国として、最終的に勝ち組になる四人は、最初から団結していたわけではなく、彼らも様々な道を模索した末に、一九四五年度の勝利にたどり着いています。

ヒトラーと中国を結び付けていたのは、一言で言えば経済協力でした。ヒトラーと蔣介石の往復書簡は、大陸で編まれた中独関係の史料集に収められています。⁽¹³⁾ 具体的には、蔣介石からヒトラーに通、ヒトラーからは一通、一九三五年から翌年にかけての書簡が残っています。唯一、現物を見ることができなのは、ニューヨークの図書館が、現物と英訳をネットで公開しているものです。⁽¹⁴⁾

では彼らが何を語り合っていたのか。先ほど申し上げたように、中国とドイツを結び付けていたのは経済協力でした。中国のどんな資源がドイツ側にとって魅力的なのか。それはタンクステンとか、錫といった鉱物資源です。それらは軍需物資です。飛行機、戦車などの生産と強化に役立つので、一九三〇年代前半のドイツは、必死にそれらを世界中からかき集めていました。

ところが、ドイツを警戒している国々は売ってくれない。ですが、

中国では豊富にあって、なおかつこれを売ってくれるわけです。中国側も見返りを期待してのことでした。それは、一つはドイツ企業の中国進出を促すためです。二つ目は軍事協力です。一九三〇年代は既に日本が満洲事変を起こし、華北分離工作も進めており、敵対関係にありました。敵は日本ということで、提携している国を蔣介石は探していたわけです。その点、ドイツは、一九三六年の日独防共協定までは、非常に魅力的な提携相手でした。中独は国際社会で疎外されていたのも似ています。

都合良く、蔣介石のもとで軍事顧問をしていた、ハンス・フォン・ゼークト、それからヴァルター・ライヘナウといったドイツ国防軍の将軍たちが、ヒトラーと蔣介石の間を取り持ってくれました。彼らは、日中戦争が始まる前にドイツに帰っていますが、そのたびにヒトラーに書簡を渡してくれたわけです。ただ、書簡の内容を見てみると、非常に蔣介石が熱心にドイツ側との提携を求めている、ドイツからの企業の誘致に熱心なのに比べると、ヒトラーは一回しか返信していませんし、内容も当たりさわらない。どちらかというと、蔣介石のヒトラーへの片思いでした。

ただ、蔣介石は必ずしもナチズムに共感してヒトラーに接近したわけではない。あくまで経済的、軍事的支援を求めた結果です。当時の中国軍の写真を見て頂くと、あの有名なドイツの鉄兜を被って並んでいます。これは、制服までドイツの物にこだわった結果です。そしてその部隊が、一九三七年の日中戦争の緒戦で、日本軍を大いに苦しめることになりました。

では、蔣介石とスターリンの往復書簡について述べましょう。蔣

介石とスターリン。「水と油じゃないか」と。その通りです。蒋介石は戦後、『中国のなかのソ連』という本を書いています(15)が、ソ連とスターリンの悪口のオンパレードです。けれども、書いていないこともあります。それは、日中戦争の初期に、ソ連が非常に熱心に中国を支援していたという事実です。

当時の書簡を見ると、蒋介石は非常にへりくだっています。今日お配りした資料に、往復書簡の一覧を載せました。発信者と受信者をご覧ください。発信者はほとんど蒋介石です。この関係を強く求めていたのは、蒋介石でした。それに対して、スターリンはあまり返信しません。あるとき、蒋介石は自分の肖像写真まで送って、スターリンに何とか取り入ろうとしています。スターリン先生恵存、ということ、スターリン先生に差し上げますということですね。

この写真を公開しているのはイェール大学です。スターリン・デジタル・アーカイブというのが二三年前にできました(16)。そちらで、蒋介石の書簡も公開しております。スターリン・デジタル・アーカイブで公開されている、スターリンの手元にあった史料と、先ほど紹介した国史館の史料をつき合わせると、彼の往復書簡の全体像がほぼ分かるわけです。

スターリンと蒋介石の往復書簡が始まったのは、一九三七年でした。一月の下旬です。どういう時期かという、北京周辺や上海が日本軍に占領されています。上海を落とした日本軍は、中華民国の首都である南京に迫ります。この絶体絶命のときに、往復書簡が始まっています。蒋介石も、スターリンに頭を下げるのは嫌でしょうがなかった。彼は一九二七年に、ソ連と手を切っていますから

(いわゆる上海クーデター)。

けれども、この差し迫った時に支援してくれそうなのは、ソ連しかありませんでした。期待していた英米などは、経済制裁を日本に課してくれなかった。

では、最初の書簡では何を言っているかという、もう南京まで退却して、仕方がないのでソ連に出兵してほしいということでした。つまり、満洲国の国境を越えて、ソ連軍(赤軍)が南下してくれないかなということ。ここまで切羽詰まっていた。ではこれに対してスターリンはどう返したかというと、「今、われわれがソ連から出兵すれば、日本が侵略を受ける側になってしまふ」。つまり日本が被害者になる。そうすると国際関係で中国とソ連が非常にまずい立場に立たされるから、われわれとしては、今はできない。

けれども、二〜三カ月すればソ連の重要な会議が開かれるので、それまで待つてほしいということ。結果から言うと、これはソ連側の口約束に過ぎませんでした。この書簡の返信を受け取った二日後に、蒋介石は南京を退去しました。つまり頼みの綱だったソ連にもはや期待できなくなって、蒋介石はいよいよ南京を捨てざるを得なかったということです。

そうした期待はずれに終わったにもかかわらず、一九三八年からの書簡は相変わらず多い。それはソ連が中国を物質的に応援してくれる数少ない国だったからです。もちろん英米にも中国への同情はあります。そして物資の買い付けなどでは協力してくれるわけですが、実際に軍事的な支援となると、ソ連に及ばない。そして蒋介石が何よりソ連から欲しがっていたのが長距離爆撃機です。なぜこれ

を欲しかったのか。実は中国空軍の作戦に、日本の爆撃が組み込まれていました。具体的には横須賀と佐世保です。今でもそうですが、海軍の基地があります。そして航空機の基地でもあります。ここを叩いて中国の上空で暴れている日本軍を止めることを計画していました⁽¹⁷⁾。蔣介石の手紙を読むと、一九三八年は爆撃機とパイロットをくれといった内容がほとんどです。そして実際にソ連側は早くからそれを提供しました。ここが英米との支援の大きな差です。

さて、一九三九年の書簡は、実は一番面白い所です。先ほど申し上げた『策略稿本』に、一九三九年度分はありません。というわけでは、この間の手紙のやり取りというのは、ほとんど、手紙そのものを見つければ方法はないのですが、その内容を見ると、蔣介石は引き続き軍事支援、物資の支援を一九三九年にも頼み続けています。この年の三月の手紙では、同盟関係に入ってくれないかということを書いてあります。五〇年間の中ソ同盟です⁽¹⁸⁾。

このあと、三月からスターリンは、中国の特使として来ていた孫文の息子、孫科と全く会わなくなります。四月には会って、その時には軍事物資の支援は任せておけということを言うのですが、ネットワークだったのは、蔣介石が「同盟してくれ」と書いていることでした。六月、中ソ通商条約を結びますが、その宴席で、「今はその同盟はできない」ということをスターリンは孫科に言いました。つまりスターリンにとって、三月の蔣介石の手紙は重荷だったわけですね。スターリンにすれば、日中戦争に深入りするのを避けたい。ですから、同盟関係に入るのには論外でした。

ただ、蔣介石の思った方向に事態が流れそうになったのも、一九

三九年です。この年、日本とソ連は、満洲国の国境のノモンハンで衝突しました。そしてこの最中に、モスクワへ英仏の軍事代表団が来て、同盟を結ぶためソ連と話し合っていました。蔣介石はこのニュースを聞いて、「ぜひ同盟を結んでくれ」とスターリンに強く訴えます。英仏ソ中の四カ国で同盟ができれば、日本に対して大きな圧力になるからです。スターリンはどう返事を書いたのか。今、その交渉をやっていると。そして日本が、中国から一〇〇倍返しを受けることも近いでしょうと。蔣介石に非常に期待させる内容でした。ところが八月二三日に独ソ不可侵条約が結ばれます。蔣介石には、青天の霹靂だったでしょう。いつスターリンがこの同盟について決意したのか、はっきりとしたことはわかっていません。ですから蔣介石に、なぜ期待させたのかも不明です。けれども、結果から見れば、蔣介石は裏切られた。実は日本も裏切られたのですが。

しかしこのあと、蔣介石は手紙を送るのをやめません。新たに、賀耀組という軍人をモスクワに送って、軍事支援をよろしくお願います、ということを書き続けています。たとえドイツと同盟を結んだソ連でも、支援国として無視できなかった。それくらい、蔣介石にとって、この時期のソ連は重要なパートナーでした。

一九四〇年に入ると、ソ連を日中が奪い合う情勢になります。具体的には、一九四〇年の夏に誕生した第二次近衛文麿内閣が、ソ連との接近を目標に掲げます。独ソ不可侵条約が結ばれたのだったら、いっそのことドイツもソ連も、そしてイタリアも含めた四つの国でブロックができるのではないかと。日独伊ソの四カ国ブロックです。それでアメリカやイギリスに対抗し、中国との戦争を終わりに導く

よう圧力をかける、という戦略です。これについては有無も含めていろいろ議論がありますが、私はこれがあつたと考えております。この政策を推進したのは、松岡洋右外相でした。松岡は、まずドイツとの提携を深めることで、ソ連への接近を探ります。

そのために日独伊三国同盟が結ばれそうになると、蒋介石はスターリンへおうかがいを立てました。「これは極東へどういう影響を及ぼしますか」と。スターリンは、一〇月一六日に返信をしました。この同盟は、中国にとつてもソ連にとつても悪いものかもしれないけれども、そうとばかりとは言い切れない。中国に有利に働くかもしれないません。なぜなら、イギリスやアメリカは、これで日中戦争に関して中立ではなくなる。明らかに中国側に同情しますよということ、具体的には、通商条約の破棄で、日米関係が絶たれたと。それから、英米からの支援助資が入ってくるビルマルトですが、それが再開されたのが何よりの証拠でしょうと。中国にとつて悪い話ではないといつてなだめています⁽¹⁹⁾。

しかしそういうスターリンは、半年後に日本と新たな条約を結びました。日ソ中立条約です。再び蒋介石は裏切られたわけですが、それでもソ連との関係は続きました。しかし、さすがに蒋介石もこのころから、本格的に提携する相手としてはソ連を見なくなっている。頼るべきはアメリカです。

実際に、日ソ中立条約が結ばれたあと、ソ連からの軍需物資の支援は先細りになりました。その原因は、日本側に強く牽制されたこともありますが、一九四一年六月にドイツとの戦争が勃発したからです。この結果、ソ連側も自国優先で、支援助資を中国に回す余裕

はなくなりました。ただ、一九四一年二月に太平洋戦争が始まったことで、皮肉ですが、中ソは同じ陣営で戦うことになります。この時に蒋介石は、ソ連が日本に宣戦布告をしてくれるものと期待していたようです。しかしスターリンは、「今はその時期ではない」と蒋介石に書きます。まさに今、モスクワでドイツと激戦を繰り広げているからだと書いています。確かに、ソ連はドイツとの戦争で手一杯でした。

最後にまとめますと、蒋介石は海外との提携を深めることで、日本と対抗しようと考え、手紙を四方八方に送っていました。非常に筆まめです。具体的にはドイツとの提携を深め、そしてソ連、最終的にはアメリカとの提携を深める方向へ動いていきます。スターリンとの手紙の内容は、主に三つに分けられます。①対日参戦、②同盟樹立、③武器援助、そして四番目は今日、紹介しませんでした。「お誕生日おめでとう」とか、「ロシア革命記念日おめでとう」といった祝電です。これはほとんど蒋介石しか送っていませんが。①が、蒋介石にとって何よりも望ましいことです。しかし、スターリンはこれには絶対に承諾しません。蒋介石からすれば、せめて②か③ですが、これを実現するためにも、蒋介石は大量の手紙を送らなければならなかったということです。蒋介石は、手紙という弾丸で、日本と戦っていたと言えるでしょう。

ご清聴どうもありがとうございました。

(1) Susan Butler (ed), *My Dear Mr Stalin: The Complete Correspondence of Franklin D. Roosevelt and Joseph V. Stalin* (New Haven and London: Yale

- University Press, 2005).
- (2) Warren F. Kimball, (ed.), *Churchill and Roosevelt: The Complete Correspondence* (3 vols., Princeton, NJ: Princeton University Press, London: Collins, 1984).
- (3) Прессника Президиума Совета Министров СССР с Президиатами США и Премьер-Министрами Великобритании во время Великой Отечественной войны 1941-1945 гг. в двух томах. М.: Госполитиздат, 1957-1968. 英語版は以下の通の Ministry of Foreign Affairs of the USSR, *Correspondence between Stalin, Roosevelt, Truman, Churchill and Clement Attlee during World War Two: Correspondence with Winston S. Churchill and Clement Attlee (July 1941-November 1945)*, (Moscow, 1957).
- (4) Прессника И. В. Сталина с Ф. Рузвельтом и У. Черчиллем в годы Великой Отечественной войны. Документальное исследование / Отв. ред. В. О. Петяглов, И. Э. Малагва. Т.1-2. М.: Олма Медиа Групп, 2015.
- (5) ロシア外務省ホームページ http://www.mid.ru/press_service/minister_speeches/_/asset_publisher/70vQR5KJWVmr&content/id/1332232?_p_id=101_INSTANCE_70vQR5KJWVmr&_101_INSTANCE_70vQR5KJWVmr_language=ru_RU [二〇一七年六月一日閲覧]。
- (6) 大久保昭男編訳『モトローヒムンローヒ秘密往復書簡』草紙社、一九九六年。
- (7) 郭榮趙編譯『蔣委員長與羅斯福總統戰時通訊』中國研究中心、一九七八年。
- (8) 丁秋潔、宋平編『鈴木木博記』『蔣介石書簡集』上中下巻、みすず書房、二〇〇〇〜二〇〇一年。
- (9) «Churchill archive». <http://www.churchillarchive.com/> [二〇一七年六月一日参照]。
- (10) 呂芳上主編『蔣中正先生年譜長編』全一二冊、國史館・中正紀念堂・中正文教基金會、二〇一四〜二〇一五年。
- (11) 「国史館檔案史料文物查詢系統」<http://ahonline.dnhi.gov.tw/index.php?act=Archive> [二〇一七年六月一日参照]。
- (12) 田嶋信雄『ナチス・ドイツと中国国民政府』東京大学出版会、二〇一三年。
- (13) 中国第二歴史檔案館編『中独外交密档(一九二七〜一九四七)』広西師範大学出版社、一九九四年。
- (14) ニューヨーク公共図書館デジタル・コレクション <https://digitalcollections.nypl.org/items/b8d8dc36-4489-b698-e040-e00a18063638> [二〇一七年六月一日閲覧]。
- (15) 蔣介石(毎日新聞外信部訳)『中国のなかのソ連——蔣介石回顧録』毎日新聞社、一九五七年。原著は、蔣中正『蘇俄在中國——中国與俄共三〇年経歴紀要』中央文物供应社、一九五六年。他にも英語やロシア語など、各国語に翻訳されている。
- (16) «The Stalin Digital Archive». <http://www.stalindigitalarchive.com/frontend/> [二〇一七年六月一日参照]。
- (17) 菊池一隆『中国抗日軍事史 一九三七〜一九四五』有志舎、二〇〇九年、一六九〜一七〇頁。
- (18) Русско-китайские отношения в XX веке. Т. 4. Кн. 1. / Отв. ред. В. С. Мясников, М.: Памятники исторической мысли, 2000. С. 411-413.
- (19) 「史達林致函蔣中正三國同盟締結之矛盾性將反使日本不利」国史館蔣中正總統文物、史料番号002-020300-00042-076。以下にも、この手紙の中国語訳が掲載されているが、本書ではロシア語原文に依拠した。薛月順編『事略稿本』第四四巻、国史館、二〇一〇年、四四七〜四四九頁。

